



Title	程度小を表わす副詞の一研究 : 「すこし/ちょっと」を対象に
Author(s)	三宅, 節子
Citation	日本語・日本文化. 2003, 29, p. 115-136
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5953">https://doi.org/10.18910/5953</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## &lt;研究論文&gt;

## 程度小を表わす副詞の一研究

—「すこし/ちょっと」を対象に—

三宅 節子

## I. はじめに

『類語国語辞典』の索引「性状」における「大変」の項目の中から「少々程度が少しばかりであること」として記載されている語りは以下のものである。

少し、少しく、少々、小さい、小さな、細やか、いささか、ちょっと、ちつと、ちつとやそつと、ちよつぱり、僅か、一つ、一<sup>ひと</sup>、微か、薄々、薄ら、うつすら、薄い、ほのか、ほんのり、ほの、淡い、浅い、大して、大した、あまり、多少、過小、最小、軽少、幾らか、幾分、やや、心持ち、精精、高が、高高、そこそこ、わずかに、ほんの

これらのうち、次の4つの条件に合致する語を除く。

## (a) 品詞的には形容詞である語

小さい、小さな、細やか、微か、薄い、ほのか、淡い、浅い（「わずか」はこれに相当するが、「わずか〜」という語幹の用法もあるので、他の形容詞と区別し「わずか」「わずかに」は一語として扱う。）

## (b) 程度副詞の基本的条件を「形容詞を修飾すること」と考え、それを修飾しないと考えられる語

薄々、うつすら、精精、高が、高高、ほんの

## (c) 否定と呼応あるいは共起する語

大して、大した、あまり、ちつとやそつと

## (d) 名詞や数量名詞

一つ、一<sup>ひと</sup>、過小、最小、軽少

さらに意味的には概括量副詞に近い「そこそこ」や語彙的な共起制限の大きい

「薄ら」「ほの」「ほんのり」、現代語では使用頻度の少ないと見られる「少しく」を除くと、次の12語が取り出せる。

少し、少々、いささか、ちょっと、ちっと、ちよっぴり、多少、幾らか、幾分、やや、心持ち、わずか(に)

加藤(1983)では「小さな程度を表す副詞」として次の14語をあげている<sup>2)</sup>。

いくぶん、いくらか、いささか、かすかに、心もち、少々、少し、多少、ちょっと、ちよっぴり、ほのかに、ほんのり(と)、やや、わずかに

これら14語から、先にあげた理由で「かすかに」「ほのかに」「ほんのり(と)」を除き、「ちっと」を加えると先の12語に一致している。したがって、この12語を「程度小を表わす副詞」とみてさしつかえないであろう。工藤(1983)ではこれらの語のうち「ほぼ疑いなく程度副詞」として「すこし/ちょっと/少々/多少/心持ち/やや」あげている<sup>3)</sup>。実際、どの語を程度小の程度副詞とするかは諸家の間でも異同がある。森岡(1994)では「ほんの」も名詞述語にかかるという特徴から当該の副詞とする<sup>4)</sup>が、「ほんの」は「ほんのちよっと/少々…」といったように程度副詞自体を修飾するという点から他の程度副詞とは異なる性質を持つ。丹保(1981)では、度合の低い程度副詞のうちに「ほぼ」を含めた<sup>5)</sup>が、相対的形容詞と共起しない点で、工藤(1983)のあげた程度副詞とは異なる。

本稿では、用例採集のコーパスとして、小説と雑誌という「書きことば」としては最も標準的と考えられる二つのジャンルを採用した。各々において、上記の12の副詞について、その用例数を比較してみよう。小説においては、「すこし」が群を抜いており、「ちよっと」が続く。しかし、その他の副詞と比べると、この二つの副詞の使用数は極めて多い。3位に位置する「わずか(に)」も「ちよっと」の3分の1に満たない。

いくぶん(29例)、いくらか(25例)、いささか(54例)、心もち(1例)、少々(39例)、すこし(625例:「すこしも」を含まない数)、多少(36例)、ちよっと(322例)、ちよっぴり(3例)、ちっと(1例)、やや(10例)、わずか(に)(76例)

雑誌においては次のようである。

いくぶん(3例)、いくらか(6例)、いささか(33例)、心もち(0例)、少々

(44例)、すこし (382例:「すこしも」を含まない数)、多少 (51例)、ちよつと (402例)、ちよつぱり (12例)、ちつと (1例)、やや (45例)、わずかに (171例)

この数字を見ると、程度小を表わす副詞にあつては「すこし」と「ちよつと」の使用が非常に多いということでは同様だが、二つの副詞の出現数の差はわずかで、しかも「ちよつと」の方が多い。これは、雑誌ではインタビューや対談が盛り込まれているため、会話がそのまま書き写されている部分が多く、話しことばである「ちよつと」が多くなるためだと考えられる。本稿では、二つのジャンルにおいて、程度小を表わす副詞群の中でも、圧倒的にその使用が多い「ちよつと」と「すこし」を研究対象とする。なお論文全体にもとづく指摘の場合はいちいち引用箇所を明記していない。

## II. 先行研究と問題提起

先行研究において、この二つの副詞だけを個別に記述したものは今のところ見当たらない。先の加藤 (1983) では「小ささの度合」によって、研究対象となった副詞をA (かすかに、心もち、ほのかに、ほんのり)、B (いくぶん、多少、いささか、いくらか、やや)、C (少々、少し、ちよつと、ちよつぱり、わずかに) の三つのグループに分けているが、「すこし」と「ちよつと」は最もその度合の高いCグループの中に入っている。その根拠は「ほんのり」や「ごく」の上接である。また、二つの副詞は、IVで述べるが、Bグループの副詞とともに、八つの程度内容のすべてを修飾しうるといふ。ここでは、「少し」と「ちよつと」は常に同じグループの語として捉えられ、「ごく～」の用法の有無以外には二つの副詞の「意味・用法上の微妙な相違」については触れられていない。加藤 (1983) をさらに発展させたと考えられる加藤 (1997) では、14語の副詞を反期待という新たな軸で分類しようと試みるが、ここでも「すこし」と「ちよつと」は「ちよつぱり」とともに反期待の内部構造の許容、非許容のいずれにも立つことができる<sup>6)</sup>として、やはり同類に扱われている。

工藤 (1983) は程度副詞を評価性と程度性の両面をもつものとして捉えるが、「すこし」と「ちよつと」は「もつと」とともにことごら的な量性が強く、また叙

法制限もないので、「量副詞の方に本籍をうつすことになる<sup>7)</sup>」と言う。その主張の根拠は、Ⅲで検証するが、とりたて助詞「は・も」などを下接しない、名詞述語にならない、修飾語を受けえないという程度副詞の一般的な形式的特徴を満たさないこと、「ごはんを～食べた」のような量副詞の用法を持つこと、「かなり」「相当」のように量副詞の用法を持つ程度副詞とも異なり、比較性の強い「もっと」と同様「ごはんを～食べろ」のような命令の叙法と共起することなどである。工藤他(2000)でも表現は異なるが、二つの副詞は「量副詞に隣接する<sup>8)</sup>」となっている。

丹保(1981)では「ちょっと」に関しては触れていないが、「度合の低い程度副詞」として「少し」「やや」「ほぼ」の3語を取り上げ、それらの意義素性を明らかにしようとする。ここで「少し」に関する記述を拾っていくと、それは「状态的意義」の度合を示すものと、格成分の数・量的度合を示すものの2通りがある。また、情意的意義を修飾することでも、話者の意志を表わす叙法と共起することでも「やや」や「ほぼ」と異なる。「少し」には、程度副詞としてだけでなく、量の副詞としての用法があること、語彙的にも叙法的にも共起制限が緩やかであることなど、工藤(1983)の主張を1面では裏付けるものとなっている。

森田(1989)では二つの副詞は意味面では変らないとし、用法面で「ちょっと」には「ちょっとした～」の用法があり、一方、文体的には「ちょっと」は口頭語であるとし、「少し」より丁寧度が落ちる<sup>9)</sup>としている。この文体差に関しては「ちょっと」は「すこし」と比べて会話内での使用頻度が高いという点からも確かめられる。全用例数に対する割合を見ると、小説では、前者は57%、後者は34%、雑誌の場合は、38%、22%の割合となっている。さらに、「ちょっと」には会話でのみ用いられる、単独で文を成す次のような用法もある。

(1) 「あのね、ちょっと」 (『女社長』p.127)

(2) 「ちょっと!」

伸子は精一杯の怖い目つきをして見せた。 (『女社長』p.177)

このように(1)聞き手に呼びかけたり、(2)注意を促したりといった感動詞的用法<sup>10)</sup>は、「すこし」には見られない。また、「ちょっと見た目」という慣用表現や「ちょっと失礼します」「ちょっとごめんなさい」といった定型的な挨拶表現

があるが、これらも「すこし」では置き換えられない。

この節で述べた先行研究のうち、本稿では問題提起として、工藤 (1983) や工藤他 (2000) の主張、すなわち二つの副詞の量副詞への移行、あるいは隣接という点について検証していきたい。さらに、用法や文体上の差を認めた上で、「すこし」と「ちょっと」の副詞としての機能を、その使用実態を通して探していきたい。

### Ⅲ. 文法形式上の類似性

工藤 (1983) では程度副詞の形式的な特徴として、形容詞と組み合わせるという以外に、とりたて助詞「は・も」などを下接しない、名詞述語にならない、修飾語を受けえないの3点をあげた<sup>11)</sup>が、その際「すこし、ちょっと、多少、少々、いくらか、いささか」のような数量名詞性をもつものは例外とした。以下では「すこし」「ちょっと」と、用例数の少ない「いくらか」を除く他の3つの副詞についてその形式的な特徴を見ていくことにする。

#### ① 取り立て助詞の下接

すこしも	ちよつとも→ちつとも	いささかも ×多少も ×少々も
すこしは	ちよつとは	×いささかは 多少は 少々は

#### ①' その他の形式の下接

すこしでも	ちよつとでも	いささかでも 多少でも 少々でも
×すこしなりとも	×ちよつとなりとも	いささかなりとも 多少なりとも ×少々なりとも
すこしずつ	ちよつとずつ	×
すこしばかり	ちよつとばかり	×

すこしくらい	ちよつとくらい	×
×すこしした	ちよつとした	×
② 名詞的用法		
すこしだ	ちよつとだ	×いささかだ 多少だ 少々だ
すこしの	ちよつとの	いささかの 多少の 少々の
③ 副詞の上接		
ごくすこし	×ごくちよつと	×ごくいささか ×ごく多少 ごく少々
ほんのすこし	ほんのちよつと	×ほんのいささか ×ほんの多少 ほんの少々
③' その他の形式の上接		
あとすこし	あとちよつと	あと少々 (他は×)
もうすこし	もうちよつと	もう少々 (他は×)

このリストから「すこし」と「ちよつと」は、他の3つの数量名詞性を持つと言われる副詞と比べても、文法形式上かなりの類似性があることがわかる。異なっているのは「ちよつとした」の形式と「ごく」の上接のみである。さらに、「は」や「も」の下接、名詞述語になる、修飾語をとるなどの特徴から、二つの副詞は工藤(1983)の言う程度副詞の形式的な特徴を満足していないことがわかる。ただし、実際の使用にあつては、「ちよつと」は種々の付属形式をあまり伴わない。動詞を修飾対象とする場合を例にとると、付属形式を伴わない「すこし」が小説や雑誌で5~6割程度なのに対し、「ちよつと」は9割以上がそれである。これは「すこし」の数量名詞性を示すと同時に「ちよつと」におけるその希薄さを表わす<sup>12)</sup>と考えられる。

#### IV. 二つの副詞の修飾する程度内容

ここでは、二つの副詞の主として量副詞らしさを見るために、加藤 (1983) の程度内容の8分類<sup>13)</sup> (①出現程度、②感情程度、③状態程度、④時間程度、⑤距離程度、⑥その他の多寡程度 (体積、面積など)、⑦動作量程度、⑧分離量程度) を援用し、当該の副詞が修飾する程度内容のあらわれ方をみていく。④から⑥までと⑧が日常的な言語生活において数量化可能とされた程度内容である。その際、修飾対象が形容詞のものは、もともと形容詞が状態性の意を有するため、程度内容が偏ること、また、量の副詞と程度副詞の明らかな差異は形容詞を修飾することであり、それゆえ、その場合を調べても、量副詞らしさの検証というこの節の目的に有効だとは考えられないため、ここでは除外している。用例を見ていくうちに、加藤 (1983) の分類では捉えきれないものも生じて、若干補足したので、例を示しながら、説明しておきたい。①には色、匂い、音などが出現するだけでなく、それが消えていく消滅程度も含める。

- (3) …朝の光が射しこみ、あたりの壁をほのかに照らしはじめる頃、光は少しづつその輝きを失い、深い闇の記憶とともにひとつまたひとつどこかへ去っていった。  
 (『世界』p.1384)

したがって、①は出現程度とはせず人間の五感で捉えられる感覚程度とする。②には心理状態/状態変化程度を含め、生理状態/状態変化程度は③とする。⑤は④と不可分だが⑤がある場合はそれを優先している。⑥は日常言語生活においては数量化できるとなっているが、音量や力量もここに含めている。⑦の動作量程度では身体的な動作だけでなく、(4)知的動作や(5)心理的なそれも含めている。

- (4) 「ちょっと工夫を凝らしましてね。……」 (文春、7/11、p.75)  
 (5) そんな先生たちは、ディレクター氏が入り出りするたびに、少しでも注目を引こうと腐心していた。  
 (『風に』p.61)

そして、これらの他に言語を媒介とする知的活動や言語活動に伴う情報量、記憶量、発話量の程度をまとめて⑨言語量程度とする。⑨には「話す/書く」といった言語活動の動詞、「知る/わかる」などの認識活動の動詞がくる。否定形式と共に起するものは程度内容を特定しにくいので、それらは別にしている。その他としたものは「ちょっと」に多いのであるが、感動詞や慣用的な用法とはっきり区分

できないものや、程度内容を想定できないと考えられるもので、これらについてはまたVIで触れる。以上の分類基準に従い、コーパス別に、各々の分類における出現数と比率を表1にまとめている。

表1から「すこし」の場合は①から⑨までほぼ偏りなく出現しているが、「ちょっと」は④以外の⑤、⑥、⑧で極端にその出現数が少ないことがわかる。したがって、工藤の指摘した量副詞への移行については「すこし」に関しては肯定できるが、「ちょっと」については疑問が残る。量副詞としての用法はあるが、制約のある量副詞と言うべきか。程度副詞として見るなら、両者とも③の状態程度がかなりの割合で出現しており「状態性の意味をもつ語にかかって、その程度を限定する<sup>14)</sup>」という程度副詞の定義にかなっている。

最後に否定形式と組み合わせる例を見ておこう。用例数から言えば、「ちょっと」の方がはるかに多い。

(6) 「今はちょっとと説明している暇はないわ。とにかく思いきり前に走って。  
…」 (『世界』p.813)

(7) 「私? ちょっと身分は明かせないわ  
と、もったいぶっている。 (『乾杯』p.720)

(8) 私の住民税は、安い中古車ならば買えるが、新車はちょっと買えない、  
というぐらいの金額なのだ。 (文春、7/11、p.106)

(6) は実は「ちょっと [説明している暇はない]」と言っているのだが、「すこし」で置き換えれば、「少し [説明している] 暇はない」となって、文のことがら的な内容がやや変わってくるし、文意からしてもおかしくなる。(7) や (8) ははっきりした否定となっていて「すこし」では言えない。これに対して「すこし」の場合は用例数も少なく、否定形式といっても「納得のいかない」「落着かない」「分からない」といった「一語の複合形容詞性をもつ<sup>15)</sup>」ものと組み合わせられている。このことだけから見ると、「少し」の方が程度副詞らしいと言える。

## V. 形容詞、名詞と組み合わせる場合

まず、形容詞を修飾対象とするものについては、連用形副詞法も含めた形容詞全体、「ゆっくり」といった情態副詞、品詞は異なるが、(9) のように、意味的に

表1

程度内容	副詞		総数	副詞		総数
	<小> 少し	<雑> 少し		<小> ちよっと	<雑> ちよっと	
①感覚程度	17 (3.9%)	9 (3.5%)	26 (3.8%)	3 (1.5%)	1 (0.5%)	4 (1%)
②感情程度	41 (9.5%)	36 (14.1%)	77 (11.2%)	23 (11.6%)	30 (16%)	53 (13.7%)
③状態程度	95 (22%)	50 (19.6%)	145 (21.1%)	13 (6.6%)	50 (26.6%)	63 (16.3%)
④時間程度	93 (21.5%)	37 (14.5%)	130 (18.9%)	68 (34.3%)	29 (15.4%)	97 (25.1%)
⑤距離程度	29 (6.7%)	8 (3.1%)	37 (5.4%)	0 (0%)	7 (3.7%)	7 (1.8%)
⑥その他の多寡程度	53 (12.2%)	28 (11%)	81 (11.8%)	2 (1%)	10 (5.3%)	12 (3.1%)
⑦動作量程度	60 (13.9%)	29 (11.4%)	89 (12.9%)	34 (17.2%)	30 (16%)	64 (16.6%)
⑧分離量程度	14 (3.2%)	18 (7.1%)	32 (4.6%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
⑨言語量程度	21 (4.8%)	27 (10.6%)	48 (6.9%)	8 (4%)	8 (4.3%)	16 (4.2%)
⑩否定形式	4 (0.9%)	0 (0%)	4 (0.6%)	12 (6.1%)	13 (6.9%)	25 (6.5%)
⑪その他	6 (1.4%)	13 (5.1%)	19 (2.8%)	35 (17.7%)	10 (5.3%)	45 (11.7%)
総数	433 (100%)	255 (100%)	688 (100%)	198 (100%)	188 (100%)	386 (100%)

はものや人の属性を表わしており、形容詞とみなされるものも対象に含めている。また、比況の「ような」が付加する場合も、その付加によって、すでに何らかの属性を表わすとみなし、この中に分類している。

(9) 建物の内外にレッドシーダーという少し赤みがかった木材をふんだんに使うことで有名なメーカーで、…… (新潮、6/20)

すでに述べたように、形容詞はもともと状態性の意味を持っており、先の分類

であげた③の「状態程度」をあらかじめ有していると考えられ、また、⑦の「動作量程度」などはないはずである。それゆえ、詳細に程度内容を見ていくことはそれほど意味がない。それよりも、形容詞と組み合わせること自体、程度副詞の基本条件であり、量の副詞と区別される特徴であるから、ここで、形容詞を修飾対象とするものの出現率を動詞や名詞とともにあげておきたい。「その他」としてしているのは修飾対象を持たない「～だ」やそれに準ずる形式のものに、「ちょっと」ではその感動詞的用法や慣用表現を含めたものである。

表 2

修飾対象 \ 副詞	<小>	<雑>	総数	<小>	<雑>	総数
	少し	少し		ちょっと	ちょっと	
(1)動 詞	433 (69.3%)	255 (66.8%)	688 (68.3%)	198 (61.5%)	188 (46.8%)	386 (53.3%)
(2)形容詞	103 (16.5%)	72 (18.8%)	175 (17.4%)	66 (20.5%)	107 (26.6%)	173 (23.9%)
(3)名 詞	74 (11.8%)	46 (12%)	120 (11.9%)	31 (9.6%)	80 (19.9%)	111 (15.3%)
(4)その他	15 (2.4%)	9 (2.4%)	24 (2.4%)	27 (8.4%)	27 (6.7%)	54 (7.5%)
総 数	625 (100%)	382 (100%)	1007 (100%)	322 (100%)	402 (100%)	724 (100%)

この表を見ると、まず(2)の出現率は小説でも雑誌でも「ちょっと」の方がやや高く2割を越えているが、この数字を見ただけで「ちょっと」の方がより程度副詞らしいとは言えないだろう。むしろ二つの副詞は確かに形容詞や形容詞相当の語を修飾対象としており、その意味で紛れもなく程度副詞であることを再確認できる。ところで、程度副詞はすべての形容詞を修飾するわけではないことは西尾(1972)において指摘されている<sup>16)</sup>。そこでは20の形容詞といくつかの程度副詞との修飾関係を見ているが、その程度副詞の中に「すこし」が含まれており、それが修飾しないとされているのは「おびたしい」「うすぐらい」「まっくらな」「無病な」「確実な」「正しい」「ない」「いっぱいな」「同じ」である。なぜ「すこし」が修飾しないのかについて、西尾(1972)は最後の3語は「極限的」という

べき性質を持っており、普通の程度性を持たないためだとする。また、また初めの3語についてはその語義や接頭語の付加により、語自身のうちに程度上の制限を持つためとしている。「無病」も「無」という接頭語がついており、この類に属する。「確実な」「正しい」などがどうして「すこし」と共起しないのかについてはふれていないが、「自由な尺度性」を持つとされる「多い」「高い」などと比べると、その自由さの度合いが制限されているためだろう。一方、「ちょっと」には「すこし」が修飾しないとされた形容詞に類する形容詞と共起する例がいくつかある。「(11) 類のない / (10) 比類のない」「(12) 信じがたい」「(13) 凄い」「(14) 薄暗い」「(15) 秘めやかな」である。

(10) 「……しかしですな、私のやっておった研究というのは、これはちょっと比類のないほど重要かつ貴重なものであって、このことだけはどうしても御理解いただきたい。……」  
 (『世界』p.917)

(11) その事件の真相がおぼろげにつかめた時、七瀬さえもちょっと類のない恐怖にうたれた。  
 (『恋人』p.94)

(12) 医のモラルが厳しく問われている東京女子医大にはちょっと信じがたい主任教授がかつて君臨していた。  
 (文春、7/18、p.149)

(13) このチームはちょっと凄い。  
 (文春、7/11、p.70)

(14) 「そこに死体があるでしょ」

ちょっと薄暗いのと、ビニールをかけてあるので気付かなかったのだ。

(『世界』p.721)

(15) 精巣だと気づくと禁忌を犯して口に含んでしまったような、ちょっと秘めやかな表情も加わる。  
 (文春、7/18、p.87)

「類のない / 比類のない」「凄い」は程度性としては極度あるいは高度であり、「信じがたい」も否定の程度としてはかなり高度だろう。「薄暗い」「秘めやかな」は反対に程度性としては人間の感覚でかろうじてとらえられるほどの低度を示す。これらの例に「すこし」を当てはめてみると、どれもすわりが悪くなる。ここでは、「ちょっと」は程度小の程度副詞としては機能せず、二つの形容詞の語彙的な意味を強めているにすぎない。それに対して、「少し」は程度小の程度副詞なので程度性に制限のある形容詞とは共起しない。

(16) 昌也が岡みどりのマンションに近い喫茶店にたまたまいたなんて、  
ちょっと考えにくいからだ。 (『乾杯』 p.831)

この用例では「たまたま」といった蓋然性の極めて低い副詞とともに用いられていることから、文意としては「考えにくい」程度が少ないのではなく、むしろ「まったく考えにくい」に近い意味と考えるのが自然で、この例でも「ちょっと」は程度小の程度副詞としての役割を果たしていない。次に名詞を修飾対象<sup>17)</sup>とする場合を見ていきたい。

森岡では程度副詞の他と異なる特性として「時間・距離・数量・方向・程度・分量などの名詞を限定する働き」をあげている<sup>18)</sup>。「すこし」と「ちょっと」にも、形態を変えずにそのまま、あるいは「すこし(くらい/ばかり)の」「ちょっとの/ちょっとした」といった形態で名詞と組み合わさる場合の2通りがある。「すこし」は小説74例、雑誌46例「ちょっと」は小説31例、雑誌80例で、雑誌での「ちょっと」の用例が多くなるが、「ちょっとした」の使用例が多いためである。ここでは二つの副詞が組み合わさる名詞について見ていくことにする。名詞は森岡のあげたような名詞類(用例上見られるのは「前、後、早め、上、下、東、西、斜め、多め」など)を時間、空間などにおける相対的な位置や数量を表わす「相対名詞」として一括し、他「書き過ぎ、猫背」などの状態名詞、「殺人の捜査、お出かけ」など「～する」で言える動作名詞、その他に分類している。紙幅の関係もあるので、形態を変えずに名詞を限定している場合について各々の用例数のみを書き出しておく。小説では次のようになる。

すこし 相対名詞(51例)、状態名詞(8例)、動作名詞(0例)、その他(1例)

ちょっと 相対名詞(1例)、状態名詞(1例)、動作名詞(5例)、その他(1例)  
 雑誌については以下の通りである。

すこし 相対名詞(28例)、状態名詞(2例)、動作名詞(4例)、その他(2例)

ちょっと 相対名詞(9例)、状態名詞(9例)、動作名詞(3例)、その他(2例)

この数字を見ると、「すこし」は「ちょっと」と比べて、小説と雑誌のいずれにおいても、相対名詞を限定する例が目立っている。一方、「ちょっと」は雑誌では相対名詞も出現するが、ほぼ時間を表わすものに制限され、小説ではそれは慣用的に用いられる「一息」以外には見られない。相対名詞を限定するのが程度副詞

の一つの特徴なら、このことは「ちょっと」よりも「すこし」の方が程度副詞らしいことを示していると言えるだろう。この「ちょっと一息」に類似した用法としては「ちょっとひとこと／一服」があり、「すこし」では言い換えられない。実際「一息／ひとこと／一服」などは名詞の語彙的な意味のうちに「少ない量」の意をすでに含んでおり、わざわざ「すこし」や「ちょっと」で限定する必要はないのである。それゆえ、「すこし」で限定できないのはうなずけるが、「ちょっと」についてはどう考えればよいのだろうか。単に「ちょっと」の慣用表現としてしまふべきなのか。このことに関して、名詞を修飾対象とするものからは外したが、次のような興味深い用例が見られる。

(17) 「おい、先生、ちょっとハイライト一つ買ってきてくれ」(『風に』p.63)

「ハイライト一つ」はすでに数量が限定されており程度や量に変更を加える程度副詞や量副詞としての「ちょっと」を付け加える必要はない。その証拠に「ちょっと」のかわりに「すこし」を入れてみると、非文になる。

(17.1) \* 「おい、先生、すこしハイライト一つ買ってきてくれ」

「ハイライト一つ」を取り除けば、次のようになるだろう。

(17.2) 「おい、先生、ちょっと／？すこし買ってきてくれ」

「すこし」はやや変だが、「買って」があるので文脈上「何を」が類推され、その場合は言えないこともないだろう。「(…を) すこし買って来てくれ」なら、「すこし」は量副詞の用法に立てるからである。「ちょっと」の場合も無理なく言える。しかし、さらに「買って」も取り除くと「すこし」は非文となる。

(17.3) 「おい、先生、ちょっと／\*すこし来てくれ」

「来る」だけでなく「行く」でも同じような現象が起きる。同じ移動動詞でも「歩く」なら、それは時間程度と相関する距離程度で「すこし」も言える。

(17.4) 「おい、先生、ちょっと／すこし歩いてくれ」

(17.3) が「すこし」で言えないのは「行く／来る」という動詞自体の程度性に制限があるせいだろうか。しかし、依頼の表現形式以外で使われた場合、たとえば「すこし行ったら／来たら、～」のように従属節内なら「来る」はやや使いにくい、「行く」は距離程度を示す。このことについてはまたVIでふれる。

「すこし(くらい／ばかり)の～」や「ちょっとの～」は用例数が少なく、はっ

きりした違いは見られないが、小説の前者における時間量の名詞が比較的多く、「すこしのあいだ／間」というなかば慣用表現化した語句で使われる。「ちょっとのあいだ／間」は小説では使用されておらず、雑誌の用例上では見られる。「ちょっとした」では小説、雑誌共に、種々の範疇の名詞につき、はっきりした傾向を指摘できない。その上、「こと／場所／物」といった文脈の助けなしには程度内容を明らかにできない名詞につく場合も比較的多い。ここでも「すこしの／すこしくらいのこと」は可能だが、用例上では見られない。ということは「すこしの／すこしくらいのこと」と「ちょっとしたこと」というのはもはや同一の意味内容ではないということではないだろうか。「ちょっとした」は単に程度の低さを表わすだけでなく、むしろ反対の意味を持つことさえある。

(18) 「……ちゃんと筋の通った春日燈籠です。ちょっとした物です。……」

(新潮、6/27、p.65)

(19) もし本当ならちょっとしたスキャンダルだが、……(新潮、7/04、p.53)

(18) や (19) に「すこしの」を入れると文意が通じない。「ちょっとした」はここでは逆に(18)「大した」(19)「大変な」といった程度大の意味を表わしている。

## VI. 「すこし」「ちょっと」と文の叙法性<sup>19)</sup>

Vで「行く／来る」という移動動詞に関して、「依頼」といった表現形式では「すこし」は使えないことを見た。IIで見たように、工藤(1983)では当該の二つの副詞の量副詞への移行という点に関して、叙法制限がないことを一つの根拠にあげており、工藤他(2000)でも「評価性が薄く数量性の濃い(量副詞に隣接する)程度副詞も(共起する叙法が)比較的自由である<sup>20)</sup>」と述べている。ここではこの二つの副詞には本当に叙法制限はないのか、そうであるとしても、様々な叙法形式との共起のし方に何か違いはないのかといったことを実際の用例から検証していきたい。工藤他(2000)では、叙法性を発話時かつ話し手のものという基本叙法とそれ以外の副次叙法とに分ける<sup>21)</sup>が、ここでは二つの副詞と組み合わせる動詞述語の基本叙法に限って、見ていきたい。なぜ、その基本叙法に限るかという点については、工藤(1983)が程度副詞の多くが共起しない、あるいはしにくいと述べた命令・依頼・勧誘・決意(意志)などが、この基本叙法だから

である。調査する基本叙法は(ア)～しろ(命令)(イ)～してくれ(依頼)(ウ)～しよう(決意・勧誘)(エ)～だろう(推量)(オ)～そうだ(伝聞)(カ)～か(疑問)(キ)～する/した(断定)(ク)その他(「ぼくが～したい」など)<sup>22)</sup>である。この調査では様々な付属形式を伴わない「すこし」と「ちょっと」に限ったが、その理由は「もうすこし」などの『累加性』の程度副詞は命令や決意や勧誘の叙法によく用いられる<sup>23)</sup>とあるように、形式の付加が叙法性に影響する場合があるからである。

表3から、全体における基本叙法の比率は「すこし」が4割程度、「ちょっと」では6割程度であり、後者の方が比較的多い。特徴としてはどちらも(キ)が多いが、その比率は「すこし」では基本叙法中7割以上を占めているのに対し、「ちょっと」では6割程度である。後者では(イ)や(ウ)もかなり出現するためである。他方、「すこし」では(キ)を除く(ア)から(ク)の各々の全体における出現率はすべて1割以下である。これらの数字を見ると、二つの副詞の叙法制限に関しては緩やかだが全くないとは言えず、特に(17)の例が示すように「すこし」の場合が依頼の叙法形式と共起するには何らかの語彙的制約がありそうである。ところで「ちょっと」の叙法制限が比較的緩やかだという結果から、ただちに量副詞と決めつけることはできない。(17)が示すように、「ちょっと」には会話内で使われ、程度や量の用法とは考えられない例が他にも見られるからである。(表1でその他としたものの大部分がこれである。)

(20) 「いや、ちょっと受話器を取り落として……」 (『乾杯』p.265)

これは⑦の「動作量程度」に入れられるだろうか。しかし「取り落とす」のは無意図的な行為であり、強くあるいは弱く取り落としたりすることは不可能である。また、瞬間的な行為であるから、④の「時間程度」も想定しにくい。次のようなやはり無意図的な行為にも「少し」は使えない。

(21) 「私は思ったんだけど——まあ、ちょっとね——その、考えついたって言うだけで——あんまり、まあ——いい考えかどうか——でも——」

(『乾杯』p.649)

「ちょっと」が程度副詞とすれば、「考えつく」という突発的な無意志動詞にかかると考えざるをえないが、この場合も「すこし」では変だろう。

表 3

程度内容 \ 副詞	<小>	<雑>	総数	<小>	<雑>	総数
	少し	少し		ちょっと	ちょっと	
基本叙法	116 (42.6%)	56 (42.1%)	172 (42.5%)	118 (61.5%)	104 (59.1%)	222 (60.3%)
(ア) 命 令	3 (1.1%)	0 (0%)	3 (0.8%)	9 (4.7%)	4 (2.3%)	13 (3.5%)
(イ) 依 頼	5 (1.8%)	2 (1.5%)	7 (1.7%)	29 (15.1%)	16 (9.1%)	45 (12.2%)
(ウ) 勧誘・決意	15 (5.5%)	3 (2.2%)	18 (4.5%)	16 (8.3%)	4 (2.3%)	20 (5.4%)
(エ) 推 量	2 (0.7%)	0 (0%)	2 (0.5%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
(オ) 伝 聞	1 (0.4%)	2 (1.5%)	3 (0.8%)	1 (0.5%)	0 (0%)	1 (0.3%)
(カ) 疑 問	4 (1.5%)	3 (2.3%)	7 (1.7%)	3 (1.6%)	8 (4.5%)	11 (3%)
(キ) 断 定	85 (31.3%)	46 (34.6%)	131 (32.3%)	57 (29.7%)	72 (40.9%)	129 (35.1%)
(ク) そ の 他	1 (0.3%)	0 (0%)	1 (0.2%)	3 (1.6%)	0 (0%)	3 (0.8%)
副次叙法	156 (57.4%)	77 (57.9%)	233 (57.5%)	74 (38.5%)	72 (40.9%)	146 (39.7%)
総 数	272 (100%)	133 (100%)	405 (100%)	192 (100%)	176 (100%)	368 (100%)

Vでふれた「ちょっと」と移動動詞(特に「行く/来る」)の組み合わせを見よう。

(22) 「うん、じゃあちよつといこう」

野々宮が気味の悪いほどひくい声でいった。 (『新橋』p.323)

(23) 「ちよつと、わしの家に行きませんか」 (文春、8/01、p.96)

(23) は「来ませんか」と言っても同じだが、これも「すこし」では置き換えられない。しかし「すこし」が「行く」と組み合わせられないわけではない。

(24) 少し行くと、おあつらえ向きに赤電話がある。純子は十円玉を三枚入れ

て、またあの下宿の番号をダイヤルした。 (『乾杯』 p.836)

それでは、程度副詞が命令、依頼、勧誘、決意などの叙法とは共起しにくいということと関係するのだろうか。しかし、「すこし」が命令や依頼の叙法と共起しないわけではない。量の用法に立つ「すこし食べろ」や、移動動詞との組み合わせの「すこし歩こう」などは、時間程度と相関する距離程度として成立するからである。一方、「ちょっと」の場合「取り落とす」「考えつく」といった程度内容を特定できない動詞とでも容易に組み合わせたり、語彙的制約がないということから、それが程度副詞や量副詞とは異なる別の機能を持つと考えた方がよいのではないだろうか。(20) から (23) は文の事がら的な内容に変更をくわえているわけではない。おそらく、聞き手や話し手の心理的負担を和らげるという効果を持つだけである。(22) (23) は主として聞き手、(20) (21) は聞き手というよりはむしろ話し手自身の心理的負担を軽減する。それゆえ、(20) (21) は聞き手に対しては言い訳として作用することになる。ところで、(21) の例には話をつなぐ間投助詞的な用法の萌芽のようなものが見える。聞き手に対して向けられる「ちょっと」が感動詞の用法へ、話し手自身に向けられる「ちょっと」が間投助詞的な用法へと分化していったのではないだろうか。

最後に二つの副詞がともにあらわれる用例を見ておこう。

(25) 伸子は、ちょっと肩で息をついていたが、少し間を置いて、静かに言った。  
(『乾杯』 p.853)

(26) 「ぼくの方からあとで原島さんにことわっておくから、ちょっと一緒に  
行ってみよう」と、ベエさんはすこしねむむたげに見える小さな目を軽く  
何度かしばたたきながら言った。  
(『新橋』 p.157)

(27) 「…少し金を貸してくれなんて頼んでるんです。ちょっと呆れましたね」  
(『乾杯』 p.300)

(28) 漱石が「我輩は猫である」のなかにちょっと悪口を書いているが、これは  
は漱石の神経の方が少し変だったのではないかと思う。

(文春、7/11、p.117)

(29) 酔ってすこしふらついても、小便をしてちょっと休むとすぐまた飲み続  
けることができたのである。  
(『新橋』 p.141)

この二つの副詞が共起する例を見ると、状態程度や数量化が可能な程度内容のときは「すこし」が、それ以外は「ちょっと」が使い分けられているように見える。(29)は異なるが、④「時間程度」の「ちょっと」である。

## Ⅶ. まとめと今後の課題

以上、動詞や形容詞や名詞を修飾対象としていると考えられる場合の各々について、二つの副詞の程度副詞あるいは量副詞らしさと同時に、「ちょっと」においてそこから逸脱する部分を見てきた。これまで書いてきたことを総合すると、「ちょっと」は次の観点から程度副詞らしくない。

- ・ 程度副詞が共起しないとされる形容詞と共起する。
- ・ 否定形式と共起する。
- ・ 叙法制限が緩やかである。

また、次の観点から量副詞らしくない。

- ・ 数量名詞性が希薄である。
- ・ 修飾する程度内容に制約を持つ。

これらの反程度副詞、反量副詞の要素を持ちながらも、「ちょっと」はやはり程度副詞であり、同時に制約のある量副詞であり、しかも、聞き手や話し手自身に働きかける叙法(勧誘、決意、ある種の述べたてなど)においては心理的負担を和らげる一種の叙法副詞<sup>24)</sup>としても機能する。このように「ちょっと」がさまざまな用法を持つことは単に副詞、感動詞といった品詞論上の問題として片づけられない。なぜなら、これら二つの品詞は連続しておりはっきりした境界線を引くことは困難だからである。「すこし」が数量名詞性を失わずに、程度副詞、量副詞の枠組みにとどまるのに対し、「ちょっと」は感動詞との連続線上において、すなわち、数量名詞性や実質的概念性を失っていく過程において、量副詞らしさ、程度副詞らしさを失うと同時に一種の叙法副詞としての機能を持つと言えよう。今後、「ちょっと」の話しことば化が促進され、二つの副詞の役割分化がますます進行していくかどうか、注意深くその使用における推移を見ていく必要があるだろう。また、二つの副詞の推移を見るには、個々の記述だけでなく、程度小の副詞全体の動向にも注意を向ける必要がある。

## 註

- 1) 類語国語辞典 pp.335-336 参照。
- 2) 加藤 (1983) p.199 参照。
- 3) 工藤 (1983) p.178 参照。
- 4) 森岡 (1994) p.604 参照。
- 5) 丹保 (1981) p.13 参照。
- 6) 加藤 (1997) pp.90-91 参照。
- 7) 工藤 (1983) p.196 参照。
- 8) 工藤他 (2000) p.226 参照。
- 9) 森田 (1989) p.556 参照。
- 10) 話の合間に使われる間投助詞的な用法もあるが、はっきりそれとわかる用例は見当たらなかった。
- 11) 工藤 (1983) p.186 参照。
- 12) これと関連して、時間量や数量を言うとき、「すこし」は「1 時間とすこし」と言わなければならないのに対し、「ちょっと」は「と」が入らなくてもいい。このことも「すこし」の数量名詞性を裏付ける。
- 13) 8 分類の詳細と各々の例については加藤 (1983) pp.202-210 参照。
- 14) 国語学大辞典の定義。
- 15) 工藤 (1983) p.188 参照。
- 16) 西尾 (1972) pp.155-158 参照。
- 17) ここでは便宜上「修飾」という語を使っているが、「…ちょっとと一流ホテルのムード。(『p.乾杯』p.204)」は実際は「一流ホテルのムードだ」という名詞述語を修飾している。したがって、厳密には「名詞修飾」とは言えないだろう。
- 18) 森岡 (1994) p.603 参照。
- 19) 叙法性の定義については工藤他 (2000) p.184 参照。
- 20) 工藤他 (2000) p.226 参照。
- 21) 工藤他 (2000) pp.185-187 参照。
- 22) ここにあげているのは代表的な叙法形式である。
- 23) 工藤他 (2000) p.226 参照。
- 24) 同上 pp.187-188 参照。工藤他 (2000) によれば叙法副詞とは「文の叙法性に関わりをもつ副詞」であるが、叙法副詞といっても「ちょっと」には文の叙法性を明確にする働きはないだろう。

## 参考文献

- 加藤久雄 (1983) 「小さな程度を表す副詞のマトリックス」『副用語の研究』pp.199-215 明治書院
- 加藤久雄 (1997) 「程度副詞の反期待について」『日本語文法 体系と方法』pp.79-95 ひつじ書房
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能——その記述方法をもとめて——」国語研『研究報告集(3)』pp.45-92 秀英出版
- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』pp.176-198 明治書院
- 工藤 浩 (1989) 「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39
- 小矢野哲夫 (1982) 「副詞の意味記述について——方法と実際——」『日本語・日本文化』11 pp.39-63 大阪外国語大学研究留学生別科
- 丹保健一 (1981) 「程度副詞の諸相：ほぼ、やや、少しを中心に」『国語学研究』21 pp.11-19 東北大学文学部『国語学研究』刊行会編
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 三宅節子 (1995) 「形容詞『かすか』の程度性をめぐって」『日本語・日本文化』21 pp.87-103 大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- 森岡健二 (1994) 「第七章 副詞」『日本文法体系論』pp.581-622 明治書院
- 森山卓郎、仁田義雄、工藤 浩 (2000) 「3 副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』pp.163-234 岩波書店
- 渡辺 実 (1957) 「品詞論の諸問題——副用語・付属語——」『日本文法講座 I 総論』pp.77-109 明治書院

## 参考辞典

- 大野 晋、浜西正人 (1985) 『類語国語辞典』角川書店
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

## 用例出所

## [小説]

- 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(『世界』)
- 赤川次郎『女社長に乾杯』(『乾杯』)
- 井上ひさし『ブンとフン』(『ブン』)

五木寛之『風に吹かれて』(『風に』)

椎名 誠『新橋烏森口青春篇』(『新橋』)

筒井康隆『エディプスの恋人』(『恋人』)

渡辺淳一『花埋み』(『花』)

塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』(『陥落』)

(以上新潮文庫の100冊より)

群ようこ『無印良女』(『無印』)

[雑誌]

週間新潮、文春 (6月27日号～8月29日号)

〈キーワード〉 程度内容, 程度副詞, 量副詞

## A Study of Adverbs Denoting a Small Degree: Adopting *Sukoshi* and *Chotto* as the Subject

Setsuko MIYAKE

Both *sukoshi* and *chotto* are defined as adverbs of quantity as well as adverbs of degree. This paper aims to verify this definition. Contrary to *sukoshi*, *chotto* does not always seem to be an adverb of degree for the following reasons: 1) it modifies some adjectives that can not be modified by general adverbs of degree, 2) it can be used in negative sentences, 3) it is quite free from modal restriction. Furthermore, it does not always seem to be an adverb of quantity considering its nature as a quantifier and its actual use as an adverb of quantity. While we can conclude that *sukoshi* is an adverb of quantity as well as degree, *chotto*, on the other hand, has various functions, for example, as an adverb of degree and quantity, and also as a kind of adverb of modality and interjection.